

太宰府

1997
2.1

太宰府の文化財

141

版築

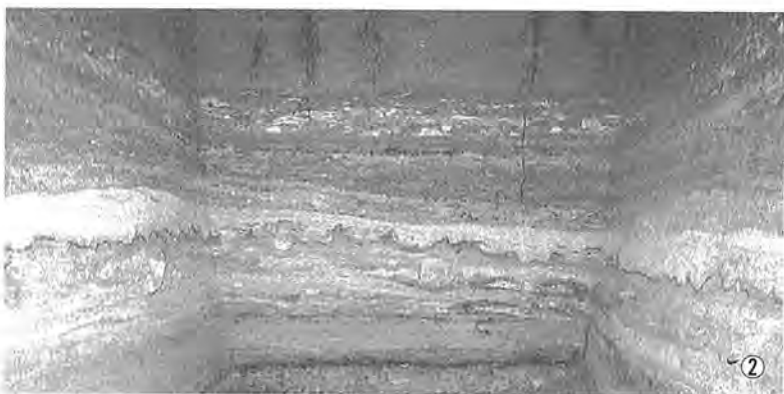
写真①は現在草や木で覆われている水城の土手を裁割った断面です。縞模様の部分とそうでない所に分かれていますのがお分かりになりますか。この縞模様部分が版築という工法で作った場所なのです。

版築とは板で枠を作り、その中に土を少し入れては杵で突き固め、また積んではたたき締めて、土を積み上げていく方法で、城壁や築地塀、建物の基礎などを造るのに用いられます。(図①を参照)一層の厚さは数センチ内外、細かいのでは1センチくらいのもあるなど、大変丁寧に突き固められていきます。だから、

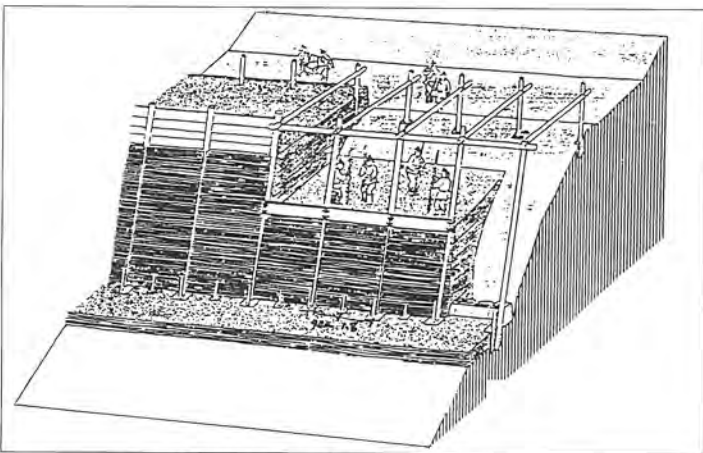
版築で築いた所は地層が細かい縞模様になるのです。この工法は古代中国の殷代(約3000年前)には既に行われており、日本には仏教建築とともに伝えられたと思われます。写真②の水城の版築は、白っぽいまさ土と、赤や青灰色の粘土質の土、砂などを使って突き固めています。中程の白い層の底辺がポコポコと波



①



②



図① 御所ヶ谷神籠石土塁版築工事推定復元図 (行橋市教育委員会小川秀樹氏作図)

打っていますが、これはまさに、杵で突き固めるという作業の跡なのです。

また写真①の版築部分を良く見ていただくと、縞模様が一本の線を境にずれています。これは版築工事の時期が違うからです。左側のが古く、その後改造した時右側を積み加え、上部は版築をせずに盛り土だけにしたので、縞模様がありません。

太宰府市内では水城の土手以外、四王寺山頂に築かれた大野城の城壁や大宰府政庁の建物が建つ土壇、観世音寺や筑前国分寺の堂や塔の基礎などにこの版築工法を見ることができ

(写真提供…九州歴史資料館)

太宰府

1997
3.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財

十六羅漢図 八幅

各幅寸法 120×49・8センチ
絹本彩色 掛幅装

室町時代
光明禅寺蔵

142



(写真提供…九州歴史資料館)

仏教の修行を完成して悟りの境地(阿羅漢果)に達した人のことを阿羅漢、略して羅漢といいます。阿羅漢とは難しい発音ですが、これは古代インドの方言、梵語のアルハンの音に漢字を当てたからです。アルハンの意味は「礼拝を受くべきもの、他の供養に応じ得るもの」つまり限らない功德を具えて人々から尊敬と供養を受けるに値する人ということなのです。

羅漢は仏の最高の弟子で、釈迦は亡くなる時、16人の羅漢に永くこの世にとどまって佛法を護るよう命じたといわれ、この16人が十六羅漢として信仰されています。そして十六羅漢に二人加えて十八羅漢、500人の五百羅漢と発展します。

さて写真は光明禅寺に伝わる十六羅漢を描いた掛軸で室町時代のもので推定されています。羅漢図は釈迦の弟子のほか、正しい教えを伝えるための修行者ということで、修行を重視する禅宗に好んで迎えられ、鎌倉時代から室町時代にかけて禅宗寺院で盛んに制作されました。これもその一つでしょう。

①は二人の羅漢が協力して煩惱を表す龍を降ろす―打ち破って悟りを開こうと修行している姿です。②は鹿が蓮華を捧げる―他から供養を受けるに値する羅漢を表しています。

羅漢図は他の仏画に比べ世俗的な傾向にあります。それは実在性を持った聖者として描かれるからで、それがかえってそれぞれの時代の絵画史・美術工芸の資料として興味を引くことにもなるのです。

光明禅寺にはこのほか、十六羅漢を一幅に描いた江戸時代の掛軸が伝わっています。作者は戒壇院に住んだこともある肥後玉名の寿福寺の住職豪潮です。

太宰府

1997
4.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

太宰府の文化財

143

木造地藏菩薩立像

クスの一木造 像高127センチ

平安時代後期 北谷区所蔵

お地藏さんほど人々に身近な仏様はいません。石に刻まれ、路傍に佇み、民話になり、流行歌で唄われました。

お地藏様は正式には地藏菩薩とい、釈迦入滅後弥勒仏が出現するまでの56億7000万年という無仏の時代、人々を救い、特に地獄に墜ちた人を助ける慈悲深い仏様というこ

とで広く信仰されました。その姿は坊主頭で、右手に杖(錫杖)、左手に宝珠を捧げる形がよく知られ、庶民にも仏教が浸透していく平安時代後期に地藏信仰も広がっていました。写真のお地藏さんは北谷の地藏堂の本尊で、今から約800年前の平安時代後期の作だということです。そして江戸時代の明和2年(176

5)と天保10年(1839)、明治22年に修理されたという木札が残っています。これらによると、この地藏像は弘法大師の作で奈良時代の763~4年ごろ作られたということになっていきます。(ただし弘法大師は774年生まれですが)また、江戸時代の地誌類は弘法大師ではなく、同時代の人ですが、伝教大師の作としています。どちらにしても、そこまで古くはないのですが、村の人々が大切に守って来たお像だということがよく分かります。

明和の修理札には「仏師太宰府山上町大橋宅治」とあり、山上町(後

の字三条)に仏師がいたことが分かりました。興味深いのは現在のごころ太宰府の仏師は他に知られていないので、この大橋さんが最初の人になります。ただ残念なことに仏師としての大橋家は続かなかつたのか、次の天保の修理では筑後宮地町(現在の久留米市宮ノ陣)の中蘭吉兵衛が仏師として名を残しています。

また修理のための世話役や寄進者には、今の北谷の人々のご先祖と思われる斉藤・平嶋・田村などの名が記されています。

地藏堂も江戸時代の宝暦2年(1752)に建てられており、これは平安時代の終わりごろに建てられたと言ひ伝えがある智光寺というお寺に縁のものと伝えられています。

現在このお地藏様は九州歴史資料館で見ることが出来ます。



太宰府の文化財

144

成屋形古墳

なりやかた

帆立貝式古墳
古墳時代中頃

長さ 約32メートル
高さ 約4メートル
所在 水城五丁目

高速道路を降り、太宰府インターチェンジの料金所を出た所で左側を見ると、小さな

雑木林に気が付きます。現在はその一部が伐られ、土饅頭のような高まりがよく分かります。



ます。そこが成屋形古墳です。インターチェンジの拡張によつて古墳の一部が削られるので、昨年末、発掘調査が行われ、以下のようなことが分かりました。

まず形は帆立貝式古墳と呼

ばれるもので、ホタテ貝の貝殻の形に似ています。これは鍵穴形の前方後円墳の一種だとも、円墳に造出しが付いた形だともいわれています。

次にこの古墳は、質の違う土を交互に突き固めて墳丘を作っています。広報2月1日号で紹介した版築という工法に似たもので、一層の厚さがいわゆる版築より少し厚く10〜30センチくらいでした。

土を積んだ上には石を貼っています。葺石といいますが、盛土の保護や古墳を立派に見せるためです。この古墳も全面ではありませんが、葺石がありました。石の葺き方で興味深いのは約130センチ間隔で使った石の大きさが違っていることです。これは一人の人間の手の届く範囲に当たり、石がどのよう

に葺かれたか想像ができるようです。

古墳といえは埴輪を思い浮かべる人も多いでしょうが、この古墳

も直径25センチの筒状の円筒埴輪が、周囲をぐるりと巻きつけていました。人々から見える方はきちんと詰めて、山側は少し手抜きをしながら。

もう一つ水を湛えた濠が巡る古墳の写真もよく見ますが、ここでも山側に、山と一線を画するために空濠が掘られていました。しかし全周ではなく、水も湛えていません。

さてこの古墳に葬られた人はどんな人だったのでしょうか。棺が納められた横穴式石室は天井石が重くのしかかっている。今回は調査できませんでした。ただ石室入口付近で見つかった土器から古墳が造られたのは1500年前の5世紀後半頃ということ、

帆立貝式古墳の多くは5世紀代に、大形の前方後円墳の従属的古墳（陪塚）として造られたと考えられていることなどから、この墓の主を想像してみても如何ですか。

現代文明に身の細る古墳ですが、市内唯一の前方後円墳として大事にしたいものです。

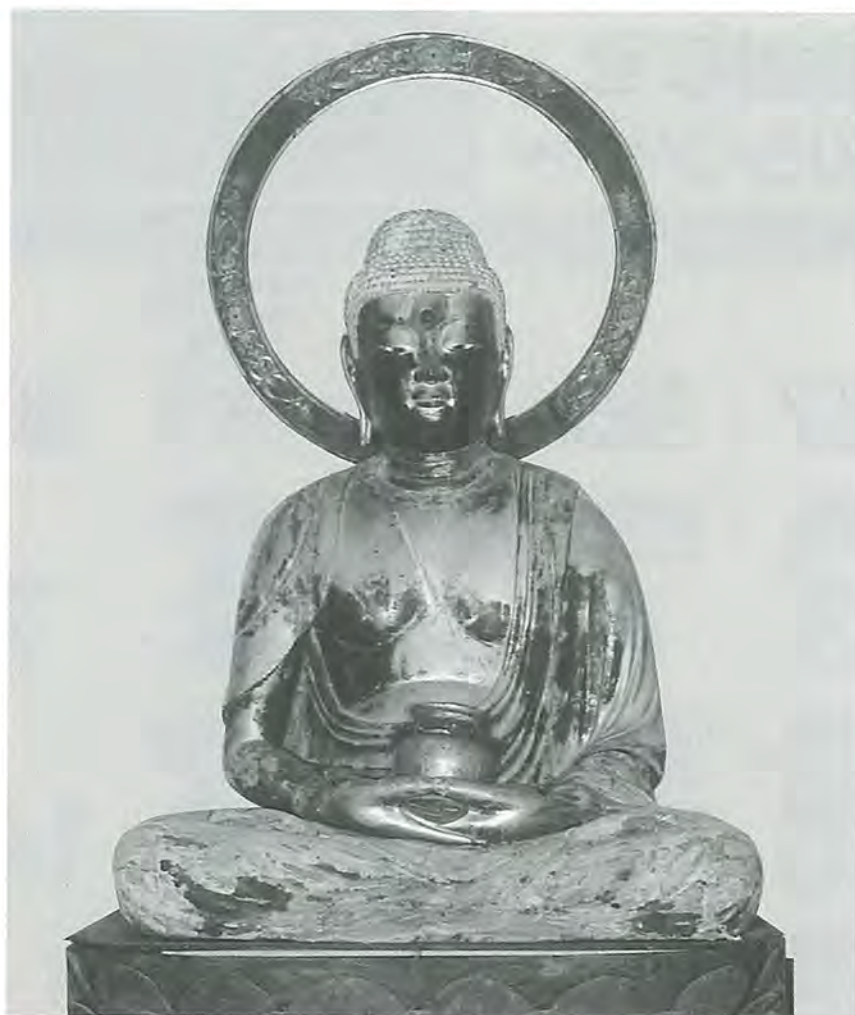
太宰府の文化財

(145)

木造薬師如来座像

ヒノキ材
鎌倉時代

像高83・0センチ
光明寺蔵



光明寺の本堂のご本尊(市政だより平成8年5月1日号参照)の横に座る薬師如来です。もとは太宰府天満宮に祀られていましたが、明治元年の神仏分離令を受けて天満宮より勧請したものです。

鎌倉時代の作で、玉眼(写実性を求めて水晶やガラスをはめて瞳を表現)、張りのある頬など、若々しい姿で端座(はたざ)していらつしゃいます。あぐらの上に置いた手は禅定印(ぜんじやういん)を組み、制作時は釈迦如来像であった可能性を示唆していますが、いつのころから薬師仏として祀られました。

体内に残る墨書銘には「慶長十一年七月廿八日 筑前国天満宮 安楽寺別當 前上座坊政所 法橋上人位 観實」とあり、江戸時代初めの慶長11年(1606)に修理されたことが分かります。

それから百年後の宝永4年(1707)にも修復されました。手にのる薬壺には「修復主嚴 戒壇現住 芯芻運照」

大仏工皇都 照暁 宝永四丁亥年 十月八日」と彫られ、以前にも何度か名の出た運照律師・仏師照暁という筑前地域の造仏修復に活躍したコンビが携わっています。

神仏分離までは天満宮は安楽寺という寺院機能も持っており、この薬師仏は天満宮安楽寺の大講堂に祀られていました。場所は現在の余香殿と回廊の間あたりで、お正月には鬼すべも行われていました。その大講堂別名薬師堂のご本尊を前述のように分離後、明治2年に光明寺に移し現在に至っています。なお、大講堂の建物は昭和14年に焼けるまで引き続き鬼すべに使われていました。

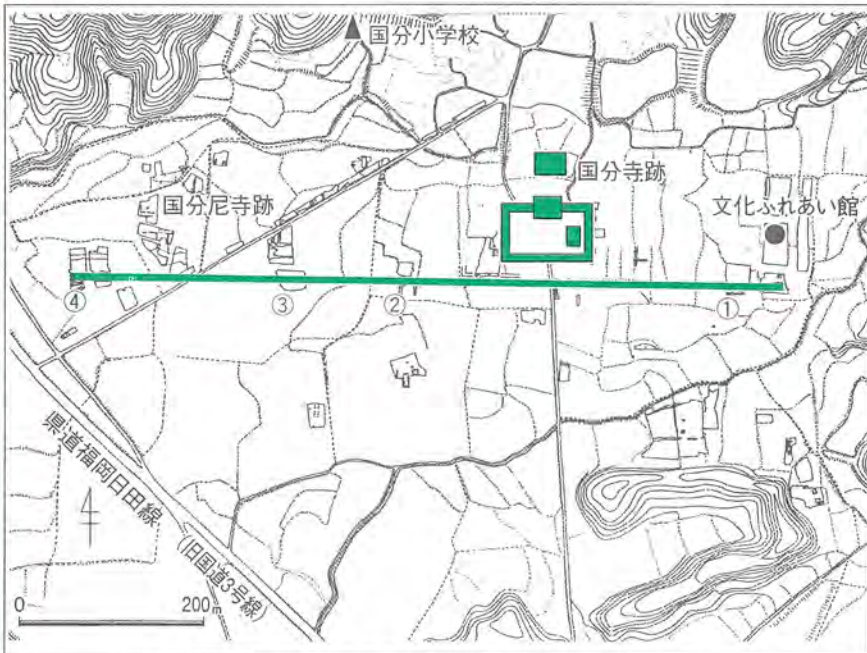
最後に、薬師仏には十二神将と呼ばれる12の仏様が従っています。光りませんが、光明寺にも天満宮から移されたと伝えられる7体の十二神将が残っています。これらの十二神将が大講堂のものか確証はないようですが、参考にご書き添えます。

太宰府の文化財

146

古代の道

奈良・平安時代
国分三丁目出土



地図は、昭和28年当時のものを基に作成しています。

今日、あなたはどんな道を歩きましたか。コンクリートの道。レンガブロックの道。土の道、これは今ではほとんどありませんね。

さて昔の人はどんな道を歩いたのでしょうか。最近国分共同利用施設そばで行った発掘調査で1200年前の道が見つかりました。その道は東側の土手に登っていく道で、下が軟弱なので、地盤を石や瓦で固める作業から行っています。そして道自体は以前にお話したことがある版築という工法で作っています。写真(広報2月1日号参照)。

地盤のゆるくない所は、版築などでわざわざ土を盛って道をつくることはせず、本来の地面をそのままに、2本の溝を掘ってその間を道としています。つまり溝は道路の側溝というわけです。この発掘現場でも西側は、このような作り方で道路が作られ、東側の版築道路に繋がっています。さて、この道はどこへ延び

ていくのでしょうか。東は、文化ふれあい館の体験学習広場の所で東西に延びる2本の溝が出土しました(図の①)。次は西へ、国分寺の前を通り過ぎ、もう少し西へ行った国分三丁目(図の②)、そして今回報告した国分共同利用施設の裏の田圃(図の③)へ下っていきます。それから市道を横切って国分三丁目(図の④)でもう1カ所、東西の溝が出土しました。そしてこの道をそのまま西へ延ばせば、水城の東門から大宰府へ通ずる官道へ突き当たります。これらを結びとばば一直線の道路になります。

この直線道路は奈良時代後半頃作られており、また国分寺の前を通ることなどを考え合わせると、筑前国分寺・国分寺に行くために作られた道ではなかったのかと想像されます。そして平安末には使用されなくなったということは、これらの寺の存亡を考えると、これらで示唆を与えます。

この広報紙は、地球環境の保全のため再生紙を使用しています。

太宰府の文化財

(147)

梵鐘（半鐘）一口（県指定有形文化財）



総高 56・8 cm
口径 33・0 cm
江戸時代 戒壇院蔵

お寺で法要の始まりを知らせる際に打つ小型の鐘を半鐘といいます。その戒壇院本堂内にある半鐘が、鐘楼に吊るされた梵鐘（平成4年8月1日号参照）と共にこの度、福岡県の文化財として指定されることになりました。

造られた時代は江戸時代の貞享元年（1684）で、博多の鋳物師礒野藤四郎尉正慶によって鋳造されています。形は朝鮮半島から伝えられた朝鮮鐘という形で、筒状の旗挿しなどが特徴です。

戒壇院は奈良時代に建てられたお寺ですが、戦国の戦乱を経て、世の中が落ち着いた江戸時代になると、復興の槌音が響きはじめます。まず本尊盧舎那仏の修理と本堂の再建にはじまり、本堂の改築、半鐘の鋳造と続きます。

この時の住持は正洞律師で、臼井村（現碓井町）臼井道意が資金援助をしました。臼井道意は、後に、本尊脇侍の文殊・弥勒菩薩の造像にも本願

施主となつて、復興に寄与しています。

鋳物師の礒野正慶は博多鋳物師の一つ礒野氏の2代目慶貞の二男孫右衛門正慶に当たると思われ、この半鐘のほか、博多聖福寺の幻住庵と、半鐘鋳造17年後に造られる戒壇院鐘楼の梵鐘に制作者として名を残しています。

この半鐘や梵鐘の上部と下部（上帯・下帯）に巡る文様は精巧で美しく、正慶の腕の確かさを感じさせます。

江戸時代に鋳造された鋳物製品は第2次大戦の時、供出の対象になったものが多く、現存しているものは意外に少ないのです。その上、この半鐘や梵鐘にタガネ彫りされた銘文は江戸時代の博多の鋳物師たちの活動を物語る資料として興味深いものがあります。江戸時代初めの戒壇院復興期の中で造られていった2つの鐘が、文化財として長く大切にされることが決まり、とてもうれしい気持ちです。

太宰府の文化財

148

水城の経塚

平安時代末
水城土塁頂上部より出土



▲経塚



(写真提供…九州歴史資料館)

▲経筒 筒身 高さ25cm 口径6cm弱
蓋 高さ2.8cm 径約13cm

水城の土塁の頂上で経塚が見つかりました。経塚とはお経を紙や粘土、銅板、石などに書いて地面に埋めた所をいいます。

なぜ、このような事が行われたかと言いますと、お釈迦様が死んで500年とか1000年経つごとに、仏の教えや行いが正しく実現されなくなり、ついには仏教が減んでしまう末法の世が来ると考えられました。日本では平安時代の中ごろから末法の世に入ると言われ、仏教が減ぶ時のために経典を写して地中に埋めておこうと経塚を作るようになりました。その後は追善供養の性格が強くなりますが、江戸時代まで作られます。

さて水城の上で見つかった経塚は3カ所で、内2つはすでに盗掘されて何もありませんでしたが、1つには経筒が残っていました。写真①のように穴を掘って石を積んだ経塚で、底の小さな石室に経筒を安置して、途中の積石の上

に魔除けの短刀2本が置かれていました。経筒の中にはお経が巻物で入れてあるのですが、長い年月を経て炭化し黒い固まりになっています。どんなお経が入っていたのか分からなくなっていました。経筒の周囲には金銅製の飾り金具とたくさんガラス玉が落ちており、これは経筒を美しく飾るために紐で編んで上に掛けられていた飾りの一部ではないかと想像されています。

経筒の形は銅板1枚をくるつと丸めて6カ所を鋸で留めた形で、よく似たものが武蔵寺の経塚でも見つかっていました。蓋は花びらを模し、これも、武蔵寺のに似ています。

これらから水城の経筒も平安時代末期の12世紀初めごろの作ではないかと考えられています。太宰府周辺は経塚跡が多い所ですが、それにしてもどうして水城の上に造られたのか、今のところ謎です。この経筒は現在、九州歴史資料館に展示されています。

この広報紙は、地球環境保全のため再生紙を使用しています。

太宰府の文化財

149

木造十一面観音菩薩坐像

ヒノキ材

像高100・5センチ

南北朝～室町時代

光明寺蔵



▲現在の状況

写真提供・九州歴史資料館

写真の十一面観音像は光明寺の庭園の奥に立つ観音堂に安置されている仏様です。すっと切れ長の目、引き締

まった顔立ちには、青年のような爽やかな印象を与えます。造られたのは南北朝から室

町時代ごろと考えられ、技巧的な彫刻は宋風をまねたものと言われています。

十一面観音というのは頭の上に11の小さな顔をのせているからこう呼ばれています。

東西南北の四方に、東北・東南・西南・西北を加えて八方、そして天地を合わせて十方で、すべての方角を表すと考え、

その一切の方向に顔を向けているという観音の功德を表現するため十の面と頭頂に如来相の正面を一つ付けた形に造

っています。観音菩薩は現世利益の強い仏様で、十一面観音も人々の憂いと悩み、病苦・障害・悪心を除く力がある

ということ、古くから信仰されています。この十一面観音像は、神仏

分離までは太宰府天満宮に祀られていました。十一面観音は天神様の本地仏なので、太宰府天満宮には何体か祀られていたようですが、この像も

その一つです。前述のように制作年代は南北朝から室町時代と考えられていますが、体

内に残る銘文から、江戸時代の延享4年（1747）に修理されたことが分かります。

銘文にはこの像は留守別当の大鳥居氏が筑後の水田荘（現在の筑後市水田）より持ってきたものであるが、頭部だけで体は破損していたので、別

当の大鳥居信貫、執行坊信恢、上座坊貫実、光明寺住職淵岩らの協力を得て福岡唐人町の牟田口正敏が願主となって再

興したことが記されています。このとき光背と台座も新調され、残る同様の銘文には京都大仏師川井忠七の名があり、

仏像もこの仏師によって修理されたと思われます。天満宮安楽寺の中世の仏像

をしのばせる仏様です。

この広報紙は、地球環境の保全のため再生紙を使用しています。

太宰府の文化財

150

岩屋城跡

戦国時代

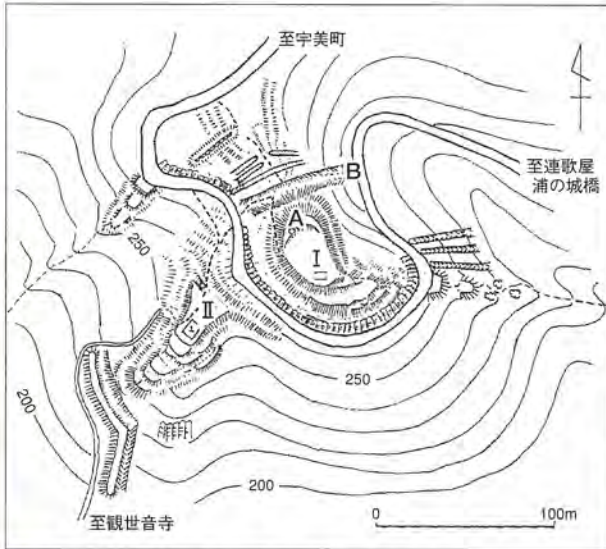
四王寺山中腹所在



▲岩屋城跡からの展望



▶岩屋城跡を遠望(東から)



▲岩屋城図:「中世城郭事典3」から



▲伝本丸跡

四王寺山の南側斜面の中腹にコブのように出た小さな峰があります。そこが昔から岩屋城跡と伝えられる戦国の山城の跡です。

岩屋城は15世紀、山口の大内氏が御笠郡代を置いたと史料に見えますが、広く知られるのは、16世紀半ば、大内氏に代わって筑前を支配した豊後の大友氏の家来、高橋鑑種が宝満山上の宝満城の支城として岩屋城を置いてからです。鑑種は大友氏に叛旗を翻すので小倉に追われ、次の城主は高橋鎮種(紹運)になります。そして天正14年(1586)7月、数万の島津軍に攻められた岩屋城の戦いで落城し、翌年には城としての役目を終えます。

さて城跡は現在のところ本格的な調査が行われていないので、はっきりした形は分かりませんが、いくつかの言い伝えの場所が残っています。図のIは本丸跡、図のAは櫓台かと考えられ、その北は大きな堀切(図のB)で背後に続く尾根を分断しています。岩屋城が、正確に言うると本丸跡がコブのように独立した峰に見えるのはそのためです。

林道を挟んで下にある二の丸(図のII)は江戸時代に建てられた紹運の墓所がありますが、ここもきれいに平場に整形され、眺望のきく所です。

この時代の山城は、人工的な平坦地(曲輪、空堀、土塁などが組み合わされて形作られているので、岩屋城もその目で山中を歩いてみると、従来言われていた城域よりかなり広い範囲に、それらしき跡が点在しているようです。

(「太宰府市史考古資料編」参照)

本丸から上に登っていくと古代の大野城の土塁の内側に紹運の馬責(馬を訓練すること)と呼ばれる広い平坦地があり、ここも大野城時代のもので利用しながら、岩屋城の時も何らかの施設として使ったのではないかと思われま

岩屋城の解明は今後を待たねばなりません。本丸跡に立つと太宰府から筑紫野にかけての平野が一望でき、武将たちが、この場所を出城とした理由がうなづけます。

この広報紙は、地球環境の保全のため再生紙を使用しています。